

令和3年度 学校評価（総括評価表）

重点課題	重点目標	評価指標	評価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)	
			評価指標による達成度	自己評価		総合評価
◆児童生徒一人一人を大切にし、その個性や能力に応じて自己実現をめざす教育の推進	<p><小学部></p> <p>・児童の個性の伸長や自己実現につながる指導の専門性を高める。</p>	<p>①年間10回以上、学部研修会を実施する。</p> <p>②年間3回以上、研修会の成果についてホームページで発信する。</p>	<p>①コンサルテーション関係で3回実施した。学部教員が講師となって学部会の後で行うミニ研修会を合わせると、年間15回以上研修会を実施することができた。</p> <p>②研修会の様子を年間9回ホームページにアップし、外部へ情報発信することができた。</p>	A	A	<p>・以前からICTをよく活用していると思っていたが、プログラミング教育も取り入れていることを知り、感心した。</p> <p>・お互いに教え合いができる職員の組織ができていことに感心した。</p> <p>・ミニ研修というのが良い。タブレット等の活用のための研修が入ってきて、自主的な研修の機会を確保することが難しい中で、短時間でも15回という回数を重ねることで、教員のスキルアップにつながっているのだろうと思う。</p> <p>・中・高等部で、卒業時に身に付けて欲しいコミュニケーション能力とあるが、コロナ禍では就業体験先で大変なことではないか。</p> <p>→高等部の就業体験では、断られることもなく希望する事業所で実施できた。コミュニケーション能力に関して、実態に合わせた支援ツールを就業体験先で実際に試してみ、課題があれば学校に持ち帰って次の目標に繋がっていくために、情報共有する会を設定している。</p> <p>・視線入力の研修は、ゲーム感覚でやれるので楽しいと思う。2回目の学校見学の時に実</p>
	<p>活動計画</p> <p>①-1 学部会後の時間等を活用し、計画的に研修を行う。</p> <p>①-2 学部の教員が一人1回以上研修リーダーとなり、自分が担当する児童の指導に必要な知識及び個性の伸長や自己実現につながる内容を精選して研修を行う。</p> <p>②効果的だと思われる指導方法等については、ホームページに掲載することで、より客観性を持たせる。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>①-1 学部会や放課後の時間を活用し、各教員が内容や日時を企画して研修を行った。</p> <p>①-2 児童が取り組んでいる内容から、情報機器の活用や衛生管理まで、児童の指導に必要なことを研修した。</p> <p>②研修の内容や様子はホームページに掲載し、保護者にも見てもらえるようにした。</p>	<p>(所見)</p> <p>・学部内の教員が、お互いに自分が得意とすることを教え合うことで、苦手な領域のことを学ぶ機会となり、教員の専門性の向上に役立った。</p> <p>・お互いが切磋琢磨することでチームとしての活気が高まり、児童への指導もより充実したものになっていった。</p> <p>・研修を通して児童の実態に即した対応や指導方法の共通理解を図ることができた。</p> <p>・意思表示や集団への参加が増える等、児童の成長が感じられる場面が随所で見られるようになった。</p>			
	<p><中・高等部></p> <p>・生徒の社会参加と自立に向けて、個々に応じたコミュニケーション能力を高められる指導（支援）方法を学部内で共通理解する。</p>	<p>評価指標</p> <p>①生徒の実態や指導（支援）方法を情報共有するための学部ケース会議を、一人につき年間2回以上実施する。</p> <p>②タブレット端末や視線入力等のICT機器の活用方法について、一人が1回以上研修を受ける。</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>①9月と2月に、学部ケース会議を行い、学部の教員全体で情報共有する場を生徒一人につき2回実施した。その他にも、学年やグループ毎に必要なに応じて情報共有する機会を持った。</p> <p>②ほとんどの教員が1回以上研修することができた。</p>	B	<p>(所見)</p> <p>・中・高等部では、学部の共通テーマとして、「社会生活への移行」を挙げているが、一人一人の実態の差が大きいので、指導方法や支援方法も異なる。</p> <p>・学校生活から社会生活へと移行していくために重要な資質・能力として、コミュニケーション能力があり、実態に合わせて支援ツールを選択していく必要がある。</p> <p>・教科担任制である中・高等部では、授業等に関わる教員の共通理解が重要であるため、定期的に学部ケース会議を行って共通理解を図っている。</p>	
	<p>活動計画</p> <p>①前期・後期の評価前に、学部ケース会議を行い、担任が生徒一人一人の状況について説明する。その後、学校卒業時に身に付けて欲しいコミュニケーション能力に対して、今できる指導や支援方法について情報共有する。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>①学部ケース会議を活用して、生徒の学習評価について協議するとともに、今の学年で身に付けておいて欲しいコミュニケーション能力や、教員の指導（支援）方法について共通理解することができた。</p>				

	②タブレット端末の活用方法やZOOMの繋ぎ方、視線入力装置の使い方等、生徒に応じた支援ツールに対する研修会を研究課や情報視聴覚課が計画する。	②生徒一人一人に適したICT機器等の支援ツールを、研修後、実際に通常の授業や遠隔授業・遠隔交流といった場面で活用する教員が増えた。	・個々の教員が有効なICT機器を活用できるよう、研修する機会を設けることで、指導（支援）力の向上に繋がった。	際の機械を見せてもらったのは良かった。 ・全員が研修に参加していれば自己評価はAだったと思うが、必要に応じて個別に教え合っている。
--	--	---	--	--

重点課題	重点目標	評価指標	評価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)	
			評価指標による達成度	自己評価		総合評価
◆安心安全な教育環境の整備と危機管理の推進	<小学部> <中・高等部> ・安心安全な学習環境の整備を行うとともに、想定されるリスク回避や緊急時の対応ができるように教員の危機管理能力を高める。	①各教室における安全点検チェックシートを作成し、リストに基づき毎月1回安全確認を行う。<小学部> ②年間3回以上、リスク回避や緊急時の対応に関する緊急対応訓練を実施する。<小学部><中・高等部>	①安全点検チェックシートを作成し、月に1回安全確認を行うことができた。 ②安全管理のワーキング、看護師による緊急時の対応の確認、避難グッズの確認等の研修や危機管理に関する研修等、年間3回以上緊急対応訓練や研修会を実施することができた。	A	A	・子供の命を守るために教員の情報共有ができています。また、リスクがあったその時々に対応できているし、訓練を重ねてノウハウを蓄積してきたような印象を受けた。 ・防災訓練のみならず、緊急対応訓練も大変重要だと思う。想定した中で緊張した訓練が大切だと思うので、そのような意識で訓練を積み重ねてほしい。 ・行政監査の項目に消防法の関係の訓練回数が指摘される場合がある。法令上やっておかなければいけないことは、きちんとやるように確認しておくことが必要である。 ・地域住民の避難訓練も各地で実施している。可能であれば参加することも検討してほしい。 ・合同での防災訓練を重ねて、地域の防災に関わっている人が学校のことをよく知らないと思うので、具体的な関わりの場を作って学校をよく知ってもらうことが大切だと思う。 ・自宅からの避難につ
		活動計画 ①-1 年度当初、小学部の教員全員で学部内を回り、想定される危険箇所について共通理解を図っておく。<小学部> ①-2 学部会において教員間で注意喚起や共通理解を図る。<小学部> ①-3 毎月最終金曜日を「安全確認の日」に設定して、チェックシートをもとに安全確認を行う。<小学部> ②緊急時の想定に基づき、学部における緊急対応訓練を計画的に行う。<小学部><中・高等部>	活動計画の実施状況 ①-1 チームに分かれ、チェックシートを元に教室等に危険箇所がないかを確認した。そのシートをまとめて、危険だと思われる場所の共通理解を図るとともに、改善できることを探して避難経路の確保等の対策をとった。 ①-2 学部会の最後に、緊急時に関するクイズや避難物品の確認等を行うことで、常に注意喚起や共通理解を図り、緊急時に対応できるように備えた。 ①-3 従来使用していた安全チェックシートをもとに、教員に安全管理アンケートをとり、教員の意見を取り入れた学部独自のチェックシートを作成し、月に1回分担当場所のチェックを行った。 ②緊急時の想定をして、緊急対応訓練の都度、問題点を洗い出し、避難時の衛生用品の準備や持ち出し袋にも引き渡しカードを整備する等の改善を行った。		(所見) ・全員で学部内の環境を見て回ること、普段は気づかない危険箇所を気づくことができた。また、その結果、ドアの開閉に支障がある物を移動したり、車いすが通れるように避難経路を確保したりする等、教育環境の改善に役立った。 ・定期的に緊急時の対応や避難グッズ等の確認をすることで、実際の地震避難時にも素早く対応することができた。 ・安全点検チェックシートを現状に合わせたものに改訂し、定期的に確認することで、普段気がつきにくいリスクを意識することができた。 ・各学部の児童生徒の実態から想定される事故等に対して、養護教諭や学校看護師の協力を得て、緊急時の教員の役割分担や動線・留意事項等について共通理解をすることで、平時から万一の事態に備えて心の準備ができるとともに、学部毎の避難用品の確認や児童生徒の個々の非常用持ち出し袋の中身についても定期的に点検することができた。	

<p><特別活動課> ・防災学習を通して、災害時における児童生徒の主体的な安全確保の能力向上を図るとともに、地域住民との交流を図り、非常時に協力や連携ができる基盤を作る。</p>	評価指標		評価指標による達成度		自己評価	総合評価	
	①各学部で防災学習を年間2回以上実施する。	②年間1回、生徒による学校周辺の地域住民への啓発活動を行うことで、周辺地域が土砂災害特別警戒区域であることを再認識してもらう。	①小学部及び中・高等部でそれぞれ2回実施した。	②中・高等部の生徒が、学校周辺の地域住民に周辺地域の防災情報リーフレットを配付した。	B	<p>(所見) ・防災学習を通して、児童生徒の防災意識を高めるとともに、学校周辺の地域住民に手作りの防災リーフレットを配付する活動を通して、地域が危険区域であることを再認識していただくとともに、本校の児童生徒に対する理解や啓発に繋げることができた。 ・コロナ禍であったので、以前に行っていた「防災オリエンテーリング」の替わりに行ったが、会話を通じた交流を行うことができなかったのが残念である。</p>	
	活動計画		活動計画の実施状況				
	①各学部の児童生徒の実態に応じて、主体的に活動できる学習内容を工夫・検討する。	②学校で作成した周辺地域の防災情報リーフレットを、「総合的な学習（探求）の時間」の授業で学校周辺の住民に配付する。	①各学部の児童生徒の実態に応じて津波や阪神大震災についての話をしたり、防災グッズを作ったりして防災意識を高めることができた。	②周辺地域の防災情報リーフレットを配付する活動を通して、住民の方に自然災害危険区域であることを再認識していただいた。			

いても考える必要がある。吉野川市も一緒に考えていきたい。
・学校で実際に火災に遭遇した経験がある。本当に起こった場合、臨機応変に対応することが大切だと思う。評価を聞いて効果的で実践的な訓練ができていると思った。
・事前予告せずに実施したり、段々と事前の情報を少なくしたり、学年などによって情報量を変えるなどしてみたりしてはどうか。
・担任は離れておいて、子どもたちだけでどこまで避難できるのか試してみてもいいか。

<p>重点課題 ◆研修の充実と教員の専門性の向上</p>	重点目標		評価指標		評価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)		
	<p><中・高等部> ・来年度の特別支援教育学会の分科会発表に向けて、遠隔による交流学習の継続及び研修による内容の充実を図る。</p>		①遠隔による交流学習(学校と吉野川市役所及び11番札所藤井寺)を年間7回以上実施する。	②分科会の助言者による指導を年間3回受ける。	①吉野川市役所と6回、11番札所と2回の計8回、遠隔による交流学習を実施することができた。	②年間4回指導を受けることができた。		A	A
			活動計画		活動計画の実施状況				
	<p><教務課></p>		①2か月に1回程度、遠隔交流を実施した後学部教員で振り返りと改善を行うことで、次回に生かしていく。	②指導助言を受けたことを発表内容に盛り込みながら資料作成に取り組む。	①交流実施後の反省会では、支援方法やタブレット操作、生徒の様子等を共有し、次時に生かしていくことができた。	②助言者(県教委)からのアドバイス等を取り入れて、パワーポイント資料を作成した。研修の都度、再確認しながら進めた。			<p>(所見) ・遠隔による学習活動の実践を繰り返しながら、教員のスキルを高めていくことができた。毎回、現地に行ってICT機器を操作する教員を代えることで、誰もが担当できるようになった。 ・発表に向けて、助言者の研修を受けたり、アドバイスを受けながら資料作成を進めたりすることができ、内容を充実させることができた。</p>
評価指標			評価指標による達成度		自己評価	総合評価			

・藤井寺との交流について、吉野川市は全行程回るお遍路さんの9割が宿泊する特別な場所であると感じているので、お接待文化をこれからも継承してほしいと思っている。
・スタンプリーのよになっているのは88か所だけである。満願して報告すると成就するというものは他にない。
・普段見慣れているから気づきにくいですが、何気ない遍路道や風景も実は素晴らしい。
・お遍路文化は素晴らしく、子どもたちには誇りを持ってお接待に行ってもらいたい。
・道徳科の評価文例集

<p>・道徳科の評価文例集の周知を行い、「個別の指導計画」の評価の際に活用されるようにする。</p>	<p>① アンケートを1学期と年度末の2回実施し、道徳科の評価文例集を「使用した」という回答が、1学期より年度末の方が10%以上、上回る。</p>	<p>① アンケートの結果、道徳科の評価を担当した教員のうち、道徳科の評価文例集を「使用した」と回答した割合が78%で1学期のアンケートの結果を28%を上回った。</p>	A	<p>(所見) ・道徳の評価者が、担任の場合が多いので、利用者は、限定されてくるが、今後も引き続き、評価文例集の広報は続けていく必要があると思われる。</p>	<p>は、教務課が長年取り組んでいる目標で、かなりブラッシュアップされてきているのだと思う。ここのB評価は、2月下旬に実施するアンケート結果によってはAになる可能性があるのではないかと。・研究課の活動計画にある社会人講師による研修後の話し合い（フィードバック）の取組は、研修の深まりということでも大切なことだと思う。・小学部が行ったミニ研修以外に、研究課でも同様にミニ研修を行っている。教員の専門性の向上に役立っていると思う。・夏季休業中の研修会では、地域の幼稚園や小学校等の教員にも案内して参加してもらうことで、地域の教育力の向上に貢献している。今後も、吉野川市教委と連携して、吉野川市の特別支援教育を支援してほしい。→巡回相談員が、学校への巡回相談とは別に、吉野川市内の障がい児学級の担任に対して、市教委と協力して研修会の講師として協力している。・年度当初は想像もなかったが、Zoom等のテレビ会議システムを活用して授業や学校行事、あるいは各種会議や研修会を行うようになった。・以前は、大きな機械を持ち込んで通信するというのを試みた時代もあったが、今だったらスマホやタブレットを使って、自分で</p>
	<p>活動計画</p> <p>① 「個別の指導計画」の評価の時期に、職員朝礼等で周知するとともに、評価文例集を積極的に活用するよう呼びかける。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>① 前期・後期の評価前や学校支援システムWeb研修の際に、活用について呼びかけを行った。</p>			
<p><研究課> ・外部講師から指導や助言を受ける機会や研修会を充実させることで、自立活動や各教科等に関する知識や経験を深め、専門性の向上を図る。</p>	<p>評価指標</p> <p>① 外部講師から指導を受けた児童生徒の担当教員を対象に、1月にアンケートを実施し、80%以上の肯定的評価を得る。</p> <p>② 外部講師を招聘した研修会や、校内における様々な障がい種別や自立活動に関するミニ研修会を合わせて10回以上実施する。</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>① 社会人講師から指導を受けた児童生徒の担当教員より93%、コンサルテーションを受けた小学部教員より100%の肯定的評価を得た。</p> <p>② 外部講師を招聘した研修会が6回ミニ研修会が9回（うち「NISE学びラボ」の動画を活用したものが7回）で、合計15回実施した。</p>	A	<p>総合評価</p> <p>(所見) ・社会人講師との授業後の話し合いは、指導の直後であるため、助言内容をより深く理解することができ、大変有効であった。 ・感染症対策のため、研修会はリモート会議システムを活用して、校内で分散して受講したり、県外の講師は大学から講演していただいたりしたため、集合対面型で実施するよりも分かりにくい部分があったという意見が聞かれた。今後、リモートでの研修会を開催する場合は、十分な研修効果を得られるよう改善する必要がある。 ・夏季休業中に行った実技を伴う研修会（造形活動）は、地域の関係機関にも案内して20名以上の申込があった。コロナ禍のため、リモート研修としたが、事前に実技に必要な物を個別に準備して送付しておく等、参加者が可能な範囲で研修を受けられるよう工夫した。</p>	
	<p>活動計画</p> <p>①-1 社会人講師による直接的な指導を受けた後、話し合い（フィードバック）の時間を年間2回ずつ設ける。</p> <p>①-2 県の「特別支援学校コンサルテーション事業」を活用し、主に小学部児童の事例に関して外部の専門家に指導や助言を受ける機会を設ける。</p> <p>②-1 理学療法士や作業療法士、言語聴覚士、大学教員を招聘し、自立活動や各教科等に関する研修会を4回実施する。</p> <p>②-2 国立特別支援教育総合研究所が制作した「NISE学びラボ」の動画を活用したミニ研修会を6回以上実施する。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>①-1 理学療法士と作業療法士による直接的な指導の後、話し合いの時間を年間2回ずつ設けることで指導助言の内容をより理解することができた。言語聴覚士は時数の関係で設けることができなかった。</p> <p>①-2 「特別支援学校コンサルテーション事業」を活用し、大学教員から2回指導助言を受けたり、発達障がいに関する講演をしていたりした。</p> <p>②-1 理学療法士や作業療法士、言語聴覚士、大学教員を招聘した研修会を6回実施した。</p> <p>②-2 「NISE学びラボ」の動画を活用したミニ研修会を、9月から3月まで毎月1回、計7回実施した。</p>			
<p><情報視聴覚課> ・教員のICT活用能力を向上させることで、在宅訪問や病棟訪問の児童生徒への学習支援にテレビ会議システム等を多く</p>	<p>評価指標</p> <p>①-1 ICT機器や支援機器等の活用に関するグループ研修や自己研修の機会を年間7回以上設定する。</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>①-1 テレビ会議システム（Zoom）を用いた授業や学校行事等、様々な場面で機器を効率よく運用するため、10回程度の研修を実施した。</p>	A	<p>(所見) ・コロナ禍のため、多くのテレビ会議システムを活用した授業、学校行事、研究大会等が行われた。また、それに関する研修</p>	

活用し、実体験的に授業や学校行事等へも参加できるような学習体制を整える。
・各種研修会や会議にもWeb上で個々に参加できる。

- ①-2 在宅や病棟の児童生徒が、児童生徒個人に貸与されたタブレット端末を活用して、テレビ会議システムを活用した取組を年間3回以上行う。
- ② 夏季休業中、テレビ会議システムを活用した研修会を開催する。

活動計画

- ①-1 ICT機器の操作研修や支援機器の製作研修、アプリケーションソフトの活用方法等についての研修を実施する。
- ①-2 授業や学校行事、交流等でテレビ会議システムを使う機会を多く設け、児童生徒が積極的に参加できるような体制を整える。
- ② テレビ会議システムの研修では、教員が会議に参加する方法を習得し、またホスト操作もできるような研修を行う。

- ①-2 在宅の児童生徒に対して、児童生徒用タブレット端末を用い、テレビ会議システムを活用した授業を30回程度行った。また、病棟の児童生徒は、10月から2週間に1回(月2回)、テレビ会議システムを使った授業が実施できた。
- ② 夏季休業中に、テレビ会議システムを活用した研修会を開催し、基礎的な接続の仕方やブレイクアウトルームの操作等、応用的な内容について実施できた。

活動計画の実施状況

- ①-1 予定していた内容を、平日の放課後を利用して校内研修を実施することができた。
- ①-2 児童生徒の実態や家庭の状況に合わせて、時機を捉えて働きかけることで、積極的に参加できる体制を整えた。
- ② テレビ会議システムの研修では、全ての教員が会議に参加する方法を習得した。ホスト操作に関しては校内で試してみることで、実践を積んだ。

会も同時進行で実施し、個々の教員が積極的に操作が行えるようになった。
・今後も、誰もが素早く安定したテレビ会議システムの活用ができるよう、研修を繰り返し行うことが必要であると考えられる。
・次年度以降も、テレビ会議システムを活用した場面が増えてくると思われるが、対面での授業や行事、交流会や研修会も子どもたちの成長発達には欠かせないものであり、教員の研修でも必要である。状況に合わせて選択ができるとともに、可能であればハイブリッドで行うことができるよう、情報機器の整備と教員の操作スキルの向上が望まれる。

きる時代になった。これがもっと広がって、誰でも手軽にできるようになれば、コロナ禍でもとても有効だと感じた。
・個別最適化を図るために、次年度以降もテレビ会議システムの活用は進んでいくと思われるので、今後も期待したい。

重点課題	重点目標	評価指標	評価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)
			評価指標による達成度	自己評価	
◆保護者・地域及び関係機関との連携・協働による「地域とともにある学校」づくり	＜中・高等部＞ ・吉野川市役所1階ロビーに生徒の作品や制作の様子の写真パネルを設置し、地域の方に本校の取組への理解を広めていく。	① 1か月に1回、作品及び写真パネルを置き換える。 ②-1 アンケートの「本校のホームページを見たことがありますか」という質問に対する「はい」の回答が、年度当初に比べて年度末に10%程度増える。 ②-2 遠隔交流の様子を、年間5回以上ホームページに掲載する。	① 写真パネルは、新しい作品を設置する際のみの変更となったが、作品は1か月に1回、設置することができた。	A	A (所見) ・作品は市役所に来庁された方に好評であった。10歳代～80歳代まで幅広い年代の方から、アンケートへの協力を得ることができた。 ・廃材を活用した作品製作への理解や、作品を通して発信することで本校を知ることができたという声も聞いた。 ・生徒数が少ないため、数多くの作品は作れないが、毎月設置することで、作品を楽しみに待っていてくださる方や、本校や
			②-1 4～7月は「はい」の回答が30%(31枚中11枚)であったが、11～1月は40%(21枚中10枚)となり、10%増えた。 ②-2 吉野川市役所の分を6回、札所の分を1回、計7回掲載することができた。		
		活動計画	活動計画の実施状況		
		① 市役所担当者と連携し、作品の数の確認や写真パネルの配置をしていく。	① 来庁者が見やすい写真パネルの位置や、作品を取りやすい置き方等、市役所担当者に意見をいただき、設置することができた。		・ホームページに児童生徒の顔が大きく写っている印象がある。保護者の了解を得ている等、工夫があれば教えてほしい。 →年度当初に、名前や顔写真等の情報提供や掲載についてのアンケートを取っている。その上で、実際に取材を受けたり掲載したりする前には、再度確認をしている。保護者は掲載に消極的だったが、子どもがホームページに自分だけが掲載されてないことに気づき、自分の意思で掲載する

②-1 毎月、アンケート用紙を回収し、回答を確認していく。また、ホームページにアンケート結果を掲載する。

②-2 ホームページに遠隔交流のコーナーを作成する。

②-1 月1回の作品設置の際にアンケートの回収と確認ができた。年度末に最終的な結果を掲載する予定である。

②-2 遠隔交流のコーナーを作成し、随時掲載することができた。

本校の子どもたちへの理解が徐々に広がっていくことへの手応えが感じられた。

・今後とも、細く長く活動を続けていくことで、本校や子どもたちのことをもっと知っていただきたい。

ようになった事例もある。(学級のコーナー)

・ホームページでの子どもの表情が生き生きしている。自分たちでホームページを確認し、載っていると嬉しいだろう。

・ホームページで発信する事で世間からの理解や見方が変わってきたと感じるか。パラリンピックなども行われているが子ども自身も考える方が変わってきているか。

→知らないということでは無いと思う。日常的に周囲に障がい者がいる生活があたりまえになると、自然な形で理解することが出来る。そのためには、普段は別に学習していても、交流学习等を通じて近くに感じてもらうことが大切だと思っている。

・学校行事に参加したが、子どもたちと教員が一緒に楽しんでいたのがとても印象的だった。一体になっているのが良かった。来年の奉納祭りにぜひ参加してほしい。

・高等部のコロナ禍で進路指導は難しい部分もあったと思うがどのような対応をしたのか。

→今年度、高等部の卒業生はいなかったが、2年生2名がそれぞれの希望する事業所で就業体験を行うことができた。保護者とも情報共有することができた。

<特別支援教育課>
・児童生徒のキャリア・パスポートを作成することで、児童生徒の自己理解を促し、本人や保護者のニーズを把握するとともに、放課後等デイサービス事業所や就業体験先との連携をすすめる、切れ目ない進路支援の充実を図る。

評価指標

①-1 1学期中に児童生徒全員のキャリア・パスポートを作成する。

①-2 年度始めに進路希望調査を実施するとともに、保護者との懇談を年2回以上実施し、保護者のニーズを把握する。

② 個別の教育支援計画(様式4 関係機関を含む支援計画)を、児童生徒が利用している放課後等デイサービス事業所に提供したり、就業体験先の施設等へ情報提供したりすることで、教育と福祉の連携を密にする。

評価指標による達成度

①-1 1学期に様式1(表面)、3学期に様式2(裏面)を児童生徒全員分作成することができた。

①-2 進路希望調査及び年2回以上保護者との懇談や電話での情報交換を実施し、保護者のニーズの把握に努めた。

② 個別の教育支援計画(様式4)の提供と情報及び意見交換をしたことで、共通理解のもと児童生徒の支援を進めることができた。

自己評価

A

総合評価

(所見)

・キャリア・パスポート、進路希望調査、個別の教育支援計画等を支援ツールとし、保護者や事業所と連携を深めることができた。

・他の支援ツールと違って、キャリア・パスポートは児童生徒自身が作成に直接関わることで、自己理解や障がい受容に繋がっていくことが目的である。しかしながら、発達段階や障がい特性により、取扱いには十分留意する必要がある。

・今後は、放課後等デイサービス事業所や就業体験先だけでなく、相談支援事業所等の関係機関とも連携を図り、切れ目ない進路支援を進めていきたい。

活動計画

①-1 児童生徒の実態に応じた様式を作成し、授業の中で教員と一緒に作成したり、家庭に持ち帰って保護者に記入してもらったりする等、計画的に作成する。

①-2 学年が変わる度に進路希望調査を実施するとともに、学習参観日等で保護者が来校した時に適宜懇談を行う。

② 児童生徒が利用している放課後等デイサービス事業所を定期的に訪問した時や高等部で就業体験を行うときに提供して、情報の共有を図る。

活動計画の実施状況

①-1 教員と一緒に作成するとともに、保護者にも協力を得ることで、家庭とより連携した支援を行うことができた。

①-2 学習参観日の中止等で保護者が来校しての懇談が難しいこともあったが、別日の設定や電話での情報交換を適宜行うことで、保護者のニーズを適切に把握することができた。

② 事業所からは「学校の様子を知ること支援の参考になる。」等の意見を頂くとともに、授業見学の実施につながった事業所もあった。

